

改編本類聚名義抄における文選訓の増補について

山本秀人

目次

序

一、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)の検出

二、図書寮本における文選出典の熟字訓についての概要

(1) 大臣注文選応永・永享点との比較

(2) 観智院本における受容状況

三、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)の特徴

四、観智院本「法上」「法中」以外における文選訓(熟字訓)の、原撰本に拠る訓と改編本における増補訓との弁別

結びに代えて——残された諸問題

序

類聚名義抄の和訓に関する研究は、戦後間もなく、和訓の一端に
出典名の明示された原撰本が発見されて以後は、原撰本を中心に盛
んに行われ、原撰本における和訓の性格の解明において多大な成果
があった。しかし、今後更に解明して行かなければならない重要な
課題は、改編本の和訓の性格と類聚名義抄改編の国語史上の意義と

を明らかにすることであろう。その為には、改編本において増補さ
れた和訓が如何なる出典に拠っているのかを解明する必要がある。
その必要性は従来から叫ばれていながら、改編本の和訓は数が尨大
であるうえ出典名が全く記されていない為、殆ど手を着けられな
いまま今日に至っているのが実情である。

今回筆者は、この問題の解明の為に、先ず、改編本の一本であり
現存の類聚名義抄唯一の完本である観智院本と、原撰本唯一の伝本
である図書寮本との和訓の比較を熟字訓について行い、これによ
って観智院本において増加している熟字訓を検出した。更に、これら
の熟字訓を訓点資料を始めとする種々の文献と比較し、その出典の
解明に当たった。その結果、観智院本において増加している熟字訓の
中には、文選訓と考えられるものが比較的多く含まれていることが
分った。⁽²⁾ 本稿では、この点について具体的に述べると共に、そこに
見出される幾つかの問題点について触れたい。

尚、図書寮本は、観智院本の「法上」「法中」の二帖に対応する
一帖のみが伝わる零本であるので、両本の比較は、この重なり合う
部分についてのみ行っている。この部分において観智院本で増加し
ている和訓は、原則として改編本において増補されたものであると
判断されることになる。

また、今回検討対象を熟字訓に限定したのは、単字訓は数が尠大であるうえ出典の推定が難しいのに対して、熟字訓は数が少いうえ単字訓よりは出典の推定或いは確定が行い易いという利点がある為である。即ち、先ず熟字訓より始めて、出典解明の糸口を掴もうとするものである。但し、ここで一つ注意を要する事として、改編本は、原撰本とは異なり単字掲出を中心として単字訓を極力多く網羅しようとしたことが窺われ、その状況に呼応して、増加している熟字訓も単字訓のそれに比べると極めて少いという状況が見られる。つまり、熟字訓の検討によって得られた結果が、そのまま単字訓にも当嵌るものか否かは即断できないということであり、その点を一往は留意しておく必要がある。

一、観智院本「法上」「法中」において増補された文選訓（熟字訓）の検出

序において述べた検討により、観智院本「法上」「法中」において、図書寮本と比較して増加していると認定された熟字訓は、全部で23例である。但し、これらの中には「法上」「法中」以外の帖にも共通して見られるものが14例含まれており、この14例については、真に「増補」された訓であるか否かを認定する為には更に別の観点からの検討が必要となる。その検討の一端は、後に文選訓について行う。

これらの増加の熟字訓全123例の内、これまで行った文選点本等との比較検討によって、「文選訓と考えられるもの或いはその可能性が強いと考えられるもの」と認定されたのは、「表1」に掲げた21例である（用例中の声点は印刷の都合により省略する）。その際、文選点本は、加點時期が室町時代に下るものの全巻が揃っ

ている事と藤原式家の古訓を伝えている事とに注目して、書陵部蔵六臣注文選応永・永享^④点を中心^⑤に用いた。しかしこの外に、藤原式家の訓に菅原家、大江家の訓を交える九条家本文選南北朝点^⑥、更に猿投神社蔵文選卷一弘安五年写本、同蔵文選卷一正安四年校本、院政初期の加點と見られる書陵部蔵文選卷二（「管見記」紙背のもの）をも併せて用いた。尚、六臣注文選応永・永享点は六十巻本であり（本文は宋版）、他の四本は無注の三十巻本である。

ところで、辞書の和訓の出典を明らかにするに当っては、その出典の認定が重要で且つ難しい問題となる。本稿で用いる「文選訓」という語は、本来的には文選に特有の訓を意味すべきものであるが、実際には俄かにそれを判断することは困難である。従って現段階では、これまで比較を行った漢籍、即ち神田本白氏文集卷三・四天永四年点、陽明文庫本並に醍醐寺本遊仙窟、書陵部蔵史記永正点、書陵部蔵春秋経伝集解文永点並に弘安点の夫々の点本には見られず、上記の文選点本にのみ同一の訓又は近い訓を見出すことができたものを、「文選訓と考えられるもの或いはその可能性が強いと考えられるもの」と認定した。よってこれらの中には、今後他の漢籍等との比較を重ねることによって除外される用例も出て来ないとは言いが切れない。しかし、それでもこれらの大多数は文選訓であろうと考えられるので、以下では、これらの熟字訓を、仮説的に「文選訓」として扱うことにする。尚、表1に掲げた21例の熟字が、文選以外のどのような中国文献に見られるのか、佩文韻府、大漢和辞典（諸橋轍次著）によって調べたまでを、表2として参考に掲げておく。

以上のようにして認定された、観智院本「法上」「法中」において増加している文選訓（熟字訓）全21例を、表1に、原則として文選

〔表1〕 観智院本「法上」「法中」において増加している文選訓(熟字訓) (21例)

| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
|--|--|---|---|---|--|
| <p>観智院本「法上」「法中」</p> | <p>書院部蔵六臣注文選 応永ノ永享点</p> | <p>九条家本文選 南北朝点</p> | <p>猿投神社蔵文選卷一 弘安五年写本</p> | <p>猿投神社蔵文選卷一 正安四年校本</p> | <p>書院部蔵文選卷二 (「菅見記」紙背のもの)</p> |
| <p>卓^{トコ}筭^{コエスキタリ} (法上96頁)</p> <p>卓^{トコ}筭^{カノ}角^{カノ} (卷一22才、両都賦)</p> <p>卓^{タク}一^{ラク}筭^{トコ}角^{ヘスケレ} (卷四42ウ、蜀都賦)</p> | <p>卓^{トコ}一^{ラク}筭^{トコ}角^{ヘスケレ} (卷一25ウ、両都賦)</p> | <p>卓^{トコ}一^{ラク}筭^{トコ}角^{ヘスケレ} (卷一、両都賦)</p> | <p>卓^{タク}一^{ラク}筭^{トコ}角^{ヘスケレ} (105行)</p> | <p>卓^{タク}一^{ラク}筭^{トコ}角^{ヘスケレ} (169行)</p> | <p>卓^{カノ}一^コ筭^{コエスキタリ}角^{カノ} (498行)</p> |
| <p>玉^{タマ}瑱^{マノツミシ} (法中15頁)</p> <p>玉^{タマ}一^{ツミ}瑱^{ツミ} (空白) (図書寮本一六二頁6行)</p> | <p>玉^{ノツ}瑱^{ミイシ} (卷一、両都賦)</p> | <p>玉^{ノツ}瑱^{ミイシ} (卷一、両都賦)</p> | <p>玉^ツ瑱^{ミイシ} (125行)</p> | <p>玉^ツ瑱^{ミイシ} (191行)</p> | |
| <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (法中36頁)</p> | <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (卷一17才、西京賦)</p> | <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (卷一、西京賦)</p> | <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (454行)</p> | <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (525行)</p> | |
| <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (卷一40才、西京賦)</p> | <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (卷一、西京賦)</p> | <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (578行)</p> | <p>都^{シカ}一^{シカ}盧^{シナカラ} (659行)</p> | | |

| ⑪ | ⑩ | ⑨ | ⑧ | ⑦ | ⑥ | ⑤ | ④ | (参考) 一盧 シカシナカラ遊 (圖書寮本一七五頁5行) |
|------------------------------|-----------------------------------|----------------------------------|---|--------------------------------|-------------------------------------|----------------------------------|-------------------------------|---------------------------------------|
| 泥濘 ミソコル (法上30頁) | 誼諱 カマヒスシ (法上51頁) | ⑨ 一繞 マツハル (法中112頁) | ⑧ 阿那 タラヤカニ (法中38頁) | ⑦ 陸離 カチチビ (法中47頁) | ⑥ 飛磔 タフテ (法中12頁) | ⑤ 半漢 イサム (法上6頁) | ④ 一 サカシ (法上112頁) | |
| 泥一濘 トミソコレリ (卷五27ウ、呉都賦) | 誼一諱 トカマヒスラフツ (卷四37才、蜀都賦) | 繚一繞 レウセウトマツハレテ (卷四13ウ、南都賦) | 阿一那 トカラヤカニ トカマヒスラフツ (卷四6ウ、南都賦) | 陸一離 トカク、カヒナリ (卷四6ウ、南都賦) | 飛一磔 ツツテ (卷三39ウ、東京賦) | 半漢 イトサメリ タリ (卷三16ウ、東京賦) | 一 トカク大ナリ (卷二19才、西京賦) | |
| 泥濘 奴定トミソコレリ (卷三、呉都賦) | 誼一諱 虚音反守花トカマヒスシウシテ (卷二、蜀都賦) | 繚一繞 而 カドトマツハレテ (卷二、南都賦) | 阿那 鳥可奴可トカラヤカニ (卷二、南都賦) | 陸一離 トカク、カヒナリ (卷二、南都賦) | 飛一磔 カ助反タフテ (卷二、東京賦) | 半漢 トイサメリ (卷二、東京賦) | 一 トカク大ナリ (卷一、西京賦) | |
| | | | | | | | 一 タカクサカシクツ (466行) | |
| | | | | | | | 一 蛾 トタカクサカシ (538行) | |
| | 誼一諱 トカマヒスラフツ (456行) | 繚一繞 而 トマツハレテ (262行) | | 陸一離 トカク、カヒナリ (213行) | 飛一磔 ノツツレイシ のヒ タフテ (83行) | | | |

| | | | | | | | |
|--|--|---|---|--|--|--|---|
| <p>⑫ 慘纏 <small>ママ</small> ハネ タル 具一</p> <p>(法中77頁、心部)</p> | <p>⑬ 瀟 アサハヤカニ</p> <p>(法上11頁)</p> | <p>⑭ 壑開 ハリヒラク</p> <p>(法中48頁)</p> | <p>⑮ 磊何 <small>ライロウ</small> トサカナリ 下 權</p> <p>(法中1頁)</p> | <p>⑯ 崕峴 <small>同</small> トサカシ 下タカシ (タカクサカシ) (タカクサカシ)</p> <p>(法上108頁)</p> | <p>⑰ 蹕蹕 <small>トケ、スンテ</small> タ、スマフ</p> <p>(法上75頁)</p> | <p>⑱ 岨岨 <small>トナヤマシク</small> ナヤマシ</p> <p>(法上109頁)</p> | <p>⑲ 沛文 <small>アクナフ</small></p> <p>(法上20頁)</p> |
| <p>慘 <small>五居作</small> 纏 <small>トハネタレタリ</small> 具一</p> <p>(卷七5ウ、甘泉賦)</p> | <p>瀟 <small>トアサハカナルニ</small> 澗 <small>トアサハカナルニ</small> 澗 <small>トアサハカナルニ</small></p> <p>(卷七15ウ、甘泉賦)</p> | <p>壑開 <small>ハリラク</small></p> <p>(卷八22ウ、上林賦)</p> | <p>磊 <small>トカク、カビニシ</small> 何 <small>トサカリニフ、キニ</small></p> <p>(卷十一30オ、魯靈光殿賦)</p> | <p>崕 <small>トタカク</small> 峴 <small>トタカク</small> 峴 <small>トタカク</small> 峴 <small>トタカク</small></p> <p>(卷十二10オ、海賦)</p> | <p>蹕 <small>トケ、スンテ</small> 蹕 <small>トケ、スンテ</small></p> <p>(卷十七5オ、文賦)</p> | <p>岨 <small>トナヤマシク</small> 岨 <small>トナヤマシク</small></p> <p>(卷十七5オ、文賦)</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>(卷三25オ、東京賦)</p> |
| <p>慘 <small>トハネタレタリ</small> 纏 <small>トハネタレタリ</small> 具一</p> <p>文 <small>トハネタレタリ</small> 澗 <small>トハネタレタリ</small> (ママ)</p> <p>文 <small>トハネタレタリ</small> 卷四、甘泉賦</p> | <p>瀟 <small>トアサハカナルニ</small> 澗 <small>トアサハカナルニ</small> 澗 <small>トアサハカナルニ</small></p> <p>文 <small>トアサハカナルニ</small> 卷四、甘泉賦</p> | <p>壑開 <small>ハリラク</small></p> <p>文 <small>トアサハカナルニ</small> 卷四、上林賦</p> | <p>磊 <small>トカク、カビニシ</small> 何 <small>トサカリニフ、キニ</small></p> <p>文 <small>トアサハカナルニ</small> 卷四、上林賦</p> | <p>崕 <small>トタカク</small> 峴 <small>トタカク</small> 峴 <small>トタカク</small> 峴 <small>トタカク</small></p> <p>文 <small>トアサハカナルニ</small> 卷四、上林賦</p> | <p>蹕 <small>トケ、スンテ</small> 蹕 <small>トケ、スンテ</small></p> <p>文 <small>トアサハカナルニ</small> 卷四、上林賦</p> | <p>岨 <small>トナヤマシク</small> 岨 <small>トナヤマシク</small></p> <p>文 <small>トアサハカナルニ</small> 卷四、上林賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> |
| <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> | <p>沛 <small>トイサメリ</small> 文 <small>トイサメリ</small></p> <p>文 <small>トイサメリ</small> 卷二、東京賦</p> |

◎ 六臣注文選応永く永享点等文選三点本と訓が一致しないが文選訓と考えられるもの

◎ 観智院本「法上」「法中」以外にも同一の熟字訓が見られるもの

| | | | | | | | | | |
|--|---|---|--|--------------------------------|--|---|---|--|--|
| <p>⑳</p> <p>〔傳〕 チトオトロイテ 一貽 (チ)は下接の音 (ママ)</p> <p>(法中77頁、心部)</p> <p>(参考) (ママ) 愕貽 (ママ) カクイテ オトロイテ</p> <p>(仏中87頁、日部)</p> <p>〔運成院本ニナシ 高山寺本ニアリ〕</p> <p>愕貽 目数</p> <p>(仏中102頁、日部)</p> <p>〔運成院本ニナシ 高山寺本ニアリ〕</p> | <p>ヲトロイテ 愕各一貽 ト助</p> <p>(卷一33ウ、両都賦)</p> | <p>五各勅吏トヲトロイテ 愕一貽 而</p> <p>(卷一、両都賦)</p> | <p>カク 愕一貽 ヲトロイテ (貽)</p> <p>而</p> <p>(166行)</p> | <p>カク シテ</p> <p>(220行)</p> | <p>㉑</p> <p>颯悠 イロメク</p> <p>(参考) 颯悠、イロメク</p> <p>(僧下55頁、風部)</p> <p>〔運成院本ニナシ〕</p> | <p>焱 作 イロト ヒロメキテ</p> <p>焱作 イロト ヒロメキテ</p> <p>(卷二24ウ、東京賦)</p> | <p>必通、由トヒロメイテ 颯一悠</p> <p>(卷二、東京賦)</p> | | <p>五家も必通反 焱一悠、由ト イワトヒロメイテ</p> <p>而</p> <p>(4行)</p> |
|--|---|---|--|--------------------------------|--|---|---|--|--|

における出現順に掲げた。この内、末尾に掲げた、六臣注文選応永永享点等文選三点本と訓が一致しないが文選訓と考えられるもの⑱、観智院本「法上」「法中」以外にも同一の熟字訓が見られるもの⑳⑲について、説明と検討を加えておく。

⑲「沛艾アグナフ」については、これまで比較検討した文選三点

本はいずれも「(ハイガイ)トイサメリ」と訓じていて、訓が一致しない。しかし、「アグナフ」という訓は、観智院本類聚名義抄仏上64頁に「趁アグナフ馬」の例が見られることにより、馬の跳ねる様を言うと考えられ、文選の意味に合う上、「沛艾」という熟字も、文選以外の中国文献にさほど多く見られるものではない(表2を参照)。

(表2)

| | | |
|---|----|---|
| ⑧ | 阿那 | 後漢書張衡傳、王褒洞簫賦、陸機擬青青河畔草詩、陸 |
| ⑦ | 陸離 | 漢書司馬相如傳、淮南子大經訓、楚辭離騷、楚辭劉向九歎逢紛、司馬相如大人賦、陳與義詩、廣雅釋訓、王念孫疏證 |
| ⑥ | 飛磔 | 宋書孝武帝紀 |
| ⑤ | 半渡 | 梁簡文帝馬槊贊序、獨狐申叔却千里馬賦、金石錄 |
| ④ | 峨峨 | 列子湯問、詩大雅棫樸、楚辭劉向九歎、賈誼虞賦、韓愈詩、白居易詩、聶夷中詩、爾雅釋訓 |
| ③ | 都盧 | 漢書西域傳、漢書地理志、太康地志、國史補、傅玄正都賦、李白大獵賦、曹植詩、元稹詩 |
| ② | 玉璫 | 詩廊風君子偕老、周禮夏官弁師、淮南子詮言訓、後漢書輿服志、楚辭九歌東皇太一 |
| ① | 卓犖 | 後漢書班固傳、魏志陳矯傳、吳志吳潛傳、蜀志秦宓傳、潘岳芙蓉賦、韓愈薦士詩、韓愈進學解、蘇軾歐陽季默饋魚求詩、世說新語 (卓犖)晉書張載傳、吳志張溫傳、蔡邕青衣賦 |

| | | |
|---|----|---|
| ⑮ | 磊砢 | 李白明堂賦、韓愈元和聖德詩、世說新語、廣韻 |
| ⑭ | 墾開 | (墾闢)漢書食貨志、後漢書龐參傳、後漢書王景傳、後漢書安帝紀、宋書文帝紀、孔叢子巡狩 |
| ⑬ | 澹澹 | (澹澹)漢書揚雄傳 |
| ⑫ | 慘繩 | (慘繩)漢書揚雄傳上 (慘繩)集韻 |
| ⑪ | 泥濘 | 抱朴子、白居易雨中招張司業宿詩、杜甫久雨期王將軍不至詩、杜甫泥功山詩、元稹後湖詩、李邕日賦、賈氏談錄 |
| ⑩ | 諛譁 | 史記鼂錯傳、後漢書楊震傳、論衡狀留、尉繚子勸卒 |
| ⑨ | 繚繞 | 荀子議兵矜糾收縲之蜀注、盧綸長安春望詩、黃香九官賦、謝靈運山居賦、韋執中白雲無心賦、李頻詩、杜甫夔州歌、鶴山題跋、畫格拾遺、江總大莊嚴寺碑 |
| | | 機慮思道北齊興亡論、陸雲失題詩、衛恒四體筆勢、焦仲卿妻詩、李郢寄湖杭二從事詩、馬臻畫意詩、魏文帝柳賦、爾雅桑柳醜條註 |

| ①⑥ | ①⑦ | ①⑧ | ①⑨ | ②⑩ | ②⑪ |
|----|--|----------|---------------------------------------|----------------------------------|-----------------|
| 峯岨 | 麴躰 (麴躰)荀子禮論、後漢書隗囂傳、南史侯景傳、古詩爲焦仲卿妻作、洛陽伽藍記敘、西溪叢語 | 岨岨 字彙 | 沛文 史記司馬相如傳、漢書司馬相如傳下大人賦、李尤平樂觀賦、駢雅釋詁 | 愕眙 (愕眙)後漢書班固傳、唐書朱泚傳、張耒求志賦、李觀詩 | 颯悠 (森攸)塾貞思游賦 |

よって、この訓は文選訓である可能性が強く、表1に掲げた他の文選訓と同列に扱っておく。

②⑩「愕眙(ガク)チトオドロイテ」と②⑪「颯悠イロメク」とは、「法上」「法中」以外の帖にも見られる例であり、真に増補された訓であるか否かが問題となるものである。この内後者の②⑩は、「僧下」の用例が改編本の一本である蓮成院本の対応部に見られないのが注目される。観智院本、蓮成院本、高山寺本の改編本三本の系統関係に関わるこれまでの筆者の検討結果によれば、熟字訓の登載状

況から見ると、蓮成院本が最も訓が少く改編本の古い形を伝えていると考えられ、一方観智院本では、同一の熟字訓を屢、他の部首に重出するという独自の状況が見られる。⑨このことより、「僧下」の用例は観智院本独自の重出と考えられ、「法中」の用例は恐らくは増補された訓であると考えて良からう。一方②⑩については、「仏中」87頁の用例が、蓮成院本、高山寺本にも見られる。従って②⑩とは逆に、「法中」の用例は観智院本独自の重出例である可能性が強いと言えよう。結論的には、やはり「仏中」87頁の用例が原撰本より受継がれたものであり、「法中」の用例はその重出されたものと考えられる。これについては、後に更に検討を加えたい。

以上のように、②⑩の1例は、真に増補された訓ではない可能性が強いので、観智院本「法上」「法中」において増加している文選訓(熟字訓)全21例の内、真の増補訓と認められるのは、②⑩を除く20例ということになる。

さて、類聚名義抄の和訓と文選との関係については、和訓の1々にその出典名が明示されている原撰本においても、既に多くの、文選を出典とする和訓が登載されていることは周知の通りである。そこで、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)⑩についてその特徴を検討する前に、図書寮本における文選出典の熟字訓についての概要を、次の「二」において把握しておきたい。

二、図書寮本における文選出典の熟字訓についての概要

原撰本たる図書寮本には、文選出典の熟字訓が全部で56例見られる。これらの熟字訓について、先ず(1)六臣注文選応永永享点との

比較を行い、次いで(2)観智院本における受容状況を検討する。

(1) 六臣注文選応永・永享点との比較

図書寮本における文選出典の熟字訓全56例を、訓の一致率、文選における出現場所、文選読形式についての一致率の三つの観点より、六臣注文選応永・永享点と比較照合する。

まず、図書寮本における文選出典の熟字訓56例の内、応永・永享点と一致するか又は近いものは44例である。これは全体の78・6%を占める。次に、その例の一部を掲げる(印刷の都合上声点は省略する)。

(図書寮本)

① 綜スヘ縞アツメ (三二六頁1行)

② 陂池 (七頁4行)

③ 巖峻ノイハホ (一四四頁1行)

(応永・永享点)

綜スヘ縞アツメ (序10丁ウ)

陂池 (卷一22丁ウ、両都賦)

巖峻ノイハホ (卷一35丁オ、両都賦)

応永・永享点と一致しないものは残りの12例である。その内の6例は漢字自体が一致しない。これら不一致例について、一々の検証は紙幅の都合上省略するが、これらには猿投神社蔵弘安本と一致するものが比較的多い。また、不一致例に

(図書寮本) 連躒トコエスキテ

(応永・永享点) 卓犖トコエスクレ

があるが、九条家本南北朝点によれば、この熟字の下接字を応永・永享点のように「犖」に作るのほ摺本であり、応永・永享点の本文

が宋版であることに符合するものである。

以上のように、若干一致しない例も存するものの、図書寮本と応永・永享点とが全体的にはかなり良く一致していることがわかる。このことはまた、応永・永享点が古訓を良く伝えていることの一つの現れであると言うことができ、同資料が、類聚名義抄の出典研究の資料として堪えることを示しているとも言えよう。

次に、図書寮本における文選出典の熟字訓全56例の、応永・永享点における出現場所を巻数で見ると、次の如くである(不一致例の対応箇所も含む)。

- 卷一(序を含む) …… 48例
- 卷七 …… 2例
- 卷十二 …… 2例
- 卷十三 …… 1例
- 卷十七 …… 1例
- 卷十九 …… 1例
- 卷二十一 …… 1例

このように、卷一が48例と圧倒的に多く、文選の六十巻本で言う所の卷一から集中的に採られていることが判明する。その理由としては、一つには文選の卷一が当時良く読まれたことが考えられる。文選の卷一が良く読まれたらうことは、猿投神社蔵の弘安本や正安本のように卷一(但しこの二本の場合は三十巻本)のみが点本が存在することからも窺える。これらの点本は、卷一のみが書写され加えられたと考えられるからである。但し、卷一より集中的に採られていることについては、更に別の観点からも理由の検討をしてみよう(12)。

次に、文選読の形式を取るか否かという観点から検討してみる。

文選の訓読においては、漢字を一度音読して、更に格助詞の「ト」や「ノ」を介してもう一度和訓で読む、所謂「文選読」の形式の屢々用いられることは、良く知られている所である。図書寮本にお

る文選出典の熟字訓全56例の中には、文選読の形式を取るものが34例見られる。これら34例は、応永〜永享点においても殆どが文選読形式を取っている（上掲の用例㊦を参照）。例外は、

㊦ 不暇（不）トイマアキツカス（不） ㊧ 琳珉（琳）ノタマ（琳）

の1例のみである。一方、図書寮本において文選読形式を取らないものは22例であり、これらは、応永〜永享点においても殆どが文選読形式を取っていない（上掲の用例㊨を参照）。この例外も、
 ㊨ 沈浮（沈）シツミウカフ（沈） ㊩ 沈一浮（沈）シツミウカフ（沈）

の1例のみである。以上のように、文選読形式についても、図書寮本と応永〜永享点とが極めて良く一致していることがわかる。

(2) 観智院本における受容状況
 図書寮本における文選出典の熟字訓全56例を、観智院本における登載率、文選読形式についての一致率の二つの観点より、観智院本と比較する。

まず、図書寮本における文選出典の熟字訓全56例を観智院本と比較すると、55例までが観智院本に登載されている。この55例の内、51例は、

㊪ 不暇（不）トイマアキツカス（不） ㊫ 琳珉（琳）ノタマ（琳）

㊬ 汎瀧（汎）トソ、イテ（汎） ㊭ 汎瀧（汎）ハムサトソ、キテ（汎）

㊮ 琳珉（琳）ノタマ（琳） ㊯ 不暇（不）トイマアキツカス（不）

の如く、観智院本においても熟字訓の形で登載されている。しかし、例えば、

㊰ 誨（誨）アツクオンヘシ（誨） ㊱ 誨（誨）カエ（誨）シツ（以下略）

誨（誨）カエ（誨）シツ（以下略）

のように、上接字と下接字との訓に分割可能なものについては、その総てではないが、4例ほどは単字訓に分割された形で観智院本に登載されている。これは、序においても述べた如く、改編本が単字訓中心に編纂されていることに呼応した状況であると考えられる。

以上のように、単字訓に分割された例もあるものの、図書寮本における文選出典の熟字訓は、観智院本にも極めて良く採られていることが分る。

次に、文選読形式について比較する。図書寮本における文選出典の熟字訓全56例の内、文選読形式を取るものは34例である。この34例の内、32例までは観智院本においても文選読形式を取っている（上掲の用例㊲を参照）。観智院本で文選読形式を取っていないものは、

㊲ 不暇（不）トイマアキツカス（不） ㊳ 琳珉（琳）ノタマ（琳）

の2例のみである。

このように、文選読形式についても、観智院本が原撰本の形を良く受継いでいることがわかる。

以上の(1)(2)の検討により明らかになった事について、再度要点を

纏めれば次のようになる。

a 図書寮本即ち原撰本の文選出典の熟字訓は、文選の六十巻本で言う所の巻一を中心に採られている。

b 文選読形式についても、原撰本と応永永享点とが良く一致している。

c 観智院本も、原撰本の文選読形式を原則として受継いでいる。これらの点を踏えた上で、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)の特徴について、次の「三」において検討したい。

三、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)の特徴

観智院本「法上」「法中」において増加している文選訓(熟字訓)は、先に表1に掲げた如く、全部で21例である。この内、⑳「愕貽(ガク)チトオドロイテ」1例は、先に「一」で述べた如く真に増補された訓ではない可能性が強いものであるが、他の20例は、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)と考えられる。ここでは、問題のある⑳を除くこれら20例の訓について、その特徴を探る一方法として、六臣注文選、応永永享点との比較を行う。その際、先に「二」において応永永享点と比較して得られた、図書寮本における文選出典の熟字訓の状況と対比する為、文選における出現場所と文選読形式についての一一致率との二つの観点より、比較照合する。応永永享点を比較に用いることの有効性は、「二」でも述べた通りである。

先ず、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓

(熟字訓) 20例の、応永永享点における出現の巻は、次の通りである(括弧内の番号は表1における用例の通し番号)。

| | |
|-----------------|----------------|
| 巻一……………2例(①②) | 巻七……………2例(⑫⑬) |
| 巻二……………2例(③④) | 巻八……………1例(⑭) |
| 巻三……………4例(⑤⑥⑯⑰) | 巻十一……………1例(⑮) |
| 巻四……………4例(⑦⑧⑨⑩) | 巻十二……………1例(⑯) |
| 巻五……………1例(⑪) | 巻十七……………2例(⑲⑳) |

これによると、巻一の例は2例に過ぎず、巻一であるか巻二以降であるかという目で見れば、巻二以降に多いことが分る。先の「二」における検討で、原撰本における文選出典の熟字訓は巻一から集中的に採られていることが判明した。右の観智院本「法上」「法中」の状況は、この原撰本の状況から必然的に生じたものと考えられるが、原撰本の場合とは対照的な点、注目される。

なお、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)では例外的な用例となる巻一の2例①②について、少し検討を加えておく。①「卓鞏コエスギタリ」については、応永永享点では巻一の「両都賦」に近似の訓が見られる外、巻四の「蜀都賦」にも近似の訓が見られる(表1を参照)。しかし、「二」で述べた如く、巻一の「両都賦」においてこの熟字の下接字を「鞏」に作るのは、応永永享点のような刊本であって、九条家本南北朝点、猿投神社蔵弘安本、同蔵正安本はこれを「鞏」に作っている。従って、①は巻四の「蜀都賦」の訓である可能性が強く、そうであるならば巻一の例ではなくなる。②「玉瑱タマノツミシ」は、図書寮本にこの熟字のみは登載されていて、注が全く施されていない(表1を参照)。ここに何らかの意味が存するかもしれない。例えば、原撰本

においてこの熟字が文選の巻一から採られながら、何らかの事情によつて訓が書込まれなくなつてしまつたものに、改編本において訓が補われたという状況も考えられなくはない。以上のように、①②の2例は、特別な事情のある例であることが分る。

次に、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓) 20例を、文選読形式を取っているか否かについて応永永享点と比較する。

先ず、応永永享点において当該訓が文選読形式を取っていないものは、表1の通し番号②⑥⑭の3例である。これら3例は、いずれも、観智院本においても文選読形式を取っておらず、問題はない。残りの17例は、応永永享点において当該訓が文選読形式を取っているものである。ところが、この17例の内、観智院本においても応永永享点と同様に文選読形式を取るものは、⑮「磊何ライラトサカナリ」の1例のみである。他の16例①③④⑤⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑯⑰⑱⑲⑳は、観智院本においては文選読形式を取っておらず、応永永享点と一致しない。原撰本における文選出典の熟字訓が、文選読形式についても応永永享点と極めて良く一致することは、先の「二」において述べた通りである。右の観智院本の状況は、原撰本の場合とは対照的であり、注目される。

以上の二つの検討で、原撰本における文選出典の熟字訓と比較しての、観智院本「法上」「法中」において増補されている文選訓(熟字訓)の特徴が明らかになつた。この特徴は即ち、改編本において増補された文選訓(熟字訓)の特徴と考えられることになる。これを纏めれば、次のようになる。

A、原撰本における文選出典の熟字訓が、文選の六十巻本で言う

所の巻一より集中的に採られているのに対して、改編本において増補された文選訓(熟字訓)は、原則として巻二以降に見られる。

B、原撰本における文選出典の熟字訓には、文選点本の訓法を反映して文選読形式を取るものが多く含まれるが、改編本において増補された文選訓(熟字訓)は、原則として文選読形式を取らない。

原撰本における文選出典の熟字訓と改編本において増補された文選訓(熟字訓)とで、このような対照的な特徴が見られることは注目値する。

ところで、観智院本「法上」「法中」において増加している文選訓(熟字訓) 全21例の内、⑳「愕哈(ガク)チトオドロイテ」の1例は、真に増補された訓ではない可能性が強いとして、以上の検討からは除外した。この訓は、表1に示したように応永永享点の巻一に見られる訓であり、且つ文選読形式を取っていて、右のA・Bの原則に合致していないことが分る。この事をも加味すれば、㉑が増補された訓ではないことは明白であると言えよう。

四、観智院本「法上」「法中」以外における文選訓(熟字訓)

の、原撰本に拠る訓と改編本における増補訓との弁別

これまで、観智院本の、図書寮本と重なり合う「法上」「法中」の帖において増補されている文選訓(熟字訓)の特徴について、図書寮本における文選出典の熟字訓と対比して検討して来た。その結果、「三」の終りに掲げたA・B二点の特徴が得られた。

さて、観智院本の「法上」「法中」以外の帖の熟字訓の中にも、

当然の事ながら文選訓と考えられるものが多く見られる。そして、これらには、原撰本より受継がれた訓と改編本において増補された訓とが混在していることになる。しかし、先のA・B二つの視点及び「二」において得られたcの視点によって眺めれば、ほぼその二者を弁別し得るだろうことが予想される。ここでは、その弁別を試みる。

観智院本「法上」「法中」以外における文選訓(熟字訓)は、全部で121例を数えた。この121例について、「二」「三」で行ったのと同様、文選読形式を取るか否かという視点で応永・永享点と比較照合した結果、後に掲げる④⑤の5類の対応型に分類された。以下、各対応型毎にその全訓を掲げ、考察を加える(用例の上欄は観智院本の文選訓(熟字訓)、下欄は応永・永享点における当該訓の所在の巻数)。

④ 観智院本、応永・永享点ともに非文選読形式(20例)

| | | | | | |
|----|---------|----|----|----------|------|
| 寔用 | コ、ヲモテ | 卷一 | 顛墜 | クツカヘリオツ | 卷一 |
| 廻帶 | メクリメクル | 〃 | 只且 | カクハカリ | 卷二 |
| 殊異 | コトニコトナリ | 〃 | 不睦 | ヨカラス | 卷三 |
| 猗歎 | ア | 〃 | 流涕 | ナカシメ | 卷四 |
| 百重 | モ、カサナリ | 〃 | 嘖然 | ニコ、ニ | 卷五 |
| 矜夸 | ホコリオコル | 〃 | 嘖然 | ニコ、 | 卷五 |
| 矜夸 | オコリホコル | 〃 | 一二 | ツハヒラカニ | 卷九 |
| 穹谷 | ワカキタニ | 〃 | 匍匐 | ハラハフ | 卷十八 |
| 遭遇 | アフニアヘリ | 〃 | 鏗磬 | スカシトホル | 〃 |
| 閑囿 | ヒラキ、ル | 〃 | 煢燈 | ヒトリアルヤモメ | 卷三十五 |

両者が共に文選読形式を取っていない例であり、巻数で判断す

るしかない。卷一の訓は、大多数が原撰本より受継がれたものと考えて良からう。

⑤ 観智院本、応永・永享点ともに文選読形式(41例)

| | | | | | |
|----|------------|----|----|-----------|-----|
| 且干 | トチ、ハカリナリ | 卷一 | 觚稜 | トソハノクニシテ | 卷一 |
| 俳回 | トタチモトホル | 〃 | 觚稜 | トソハノナリ | 〃 |
| 標校 | ト、キモノ | 〃 | 豺狼 | ノオホカミ | 〃 |
| 標校 | ト、シ | 〃 | 錯落 | トマシハレリ | 〃 |
| 徒搏 | トタムナテウテ | 〃 | 閭閻 | ノサト | 〃 |
| 徒搏 | トタムナテウテ | 〃 | 陛戟 | ノホコモタルモノ | 〃 |
| 犖々 | トテル | 〃 | 青葵 | トアサヤカナリ | 〃 |
| 杳窳 | トフカウシテ | 〃 | 鼯鼠 | トチカラオコシシテ | 卷二 |
| 杳窳 | トフカシ | 〃 | 隅目 | トマスムタフ | 〃 |
| 煌々 | トサカナリ | 〃 | 迢遼 | トハルカナリ | 卷五 |
| 燭耀 | トテレリ | 〃 | 蕭條 | トカスカニシテ | 卷八 |
| 煢々 | トテリアキラカニシテ | 〃 | 蕭條 | トカスカナリ | 〃 |
| 猗々 | トウルハシ | 〃 | 青葵 | トアサヤカナリ | 卷九 |
| 猿狄 | ノサル | 〃 | 彳亍 | トタ、スム | 〃 |
| 斐然 | トツ、ラメニシテ | 〃 | 盤薄 | トヨソノホレリ | 卷十二 |
| 穆々 | トツ、シム | 〃 | 啗齧 | トハオト、キス | 卷十三 |
| 藜々 | トサカナリ | 〃 | 啗齧 | トハオトシテ | 〃 |
| 蓋戴 | トフケリ | 〃 | 照々 | トタノシ | 〃 |
| 蓋戴 | トフキオホヘリ | 〃 | 蕭瑟 | トカスカニシテ | 〃 |
| 蔭蔚 | トサカリニシテ | 〃 | 仿徨 | トタチモトホル | 卷十九 |
| 街衢 | ノチマタ | 〃 | | | |

両者が共に文選読形式を取っている例であるので、いずれも原

撰本より受継がれた訓である可能性が強いものということになる。それに対応するように、やはり巻一が圧倒的に多く、特に巻一の例は、まず原撰本より受継がれたと見て良からう。

◎ 観智院本は非文選読形式、応永・永享点は文選読形式(56例)

| | | | | | |
|----|---------|----|----|---------|-----|
| 俣仰 | フシアフク | 卷一 | 嬋媛 | タラヤカナリ | 卷四 |
| 俯仰 | フシアフク | 〃 | 幡く | シラケタリ | 〃 |
| 徘徊 | タチモトホル | 〃 | 嗶啞 | ノ、シル | 卷五 |
| 鎮壓 | カサナリオソフ | 〃 | 夷猶 | ユウラオモフ | 〃 |
| 展季 | マメヒト | 卷二 | 嬋娟 | タラヤカナリ | 〃 |
| 張里 | ムマクスシ | 〃 | 握籛 | チ、ケシ | 〃 |
| 掲焉 | イチシルシ | 〃 | 觀縷 | ツマヒラケシ | 〃 |
| 流眇 | ナカシメ | 〃 | 觀縷 | ツマヒラカナ | 〃 |
| 睚眦 | ニラム | 〃 | 霏霏 | コマヤカニ | 卷六 |
| 睚眦 | ニラム | 〃 | 盱衡 | マユアケ | 〃 |
| 睚眦 | メミハル | 〃 | 委曲 | コケヒク | 卷七 |
| 睚眦 | ミハル | 〃 | 咀嚼 | カミハム | 卷八 |
| 翁伯 | アワラヒサキ | 〃 | 娼媚 | ナツカシ | 〃 |
| 薑芥 | アクタハカリ | 〃 | 發越 | カホル | 〃 |
| 青媚 | タカ | 〃 | 盧橘 | ハナタチハナ | 〃 |
| 高匡 | マカフラタカ | 〃 | 閭敷 | シナフ | 〃 |
| 鬢髻 | タチカミアラス | 〃 | 停僮 | マトヤカナリ | 卷九 |
| 鬢髻 | カミユヒタツ | 〃 | 周章 | アワツ | 〃 |
| 决拾 | ユカケトモ | 卷三 | 欺懇 | オホカシラナリ | 卷十一 |
| 承花 | ムマヤ | 〃 | 寗吒 | サシクム | 〃 |
| 承華 | ムマヤ | 〃 | 訥談 | シタツイタス | 〃 |

| | | | | | |
|----|-------|-----|----|-----------|-----|
| 聃談 | シタ、ル | 卷十一 | 伶俜 | サスラフ | 卷十六 |
| 霏霏 | クラシ | 〃 | 偏弧 | カクミナシコ | 〃 |
| 仿像 | ホノカナリ | 卷十二 | 旖旎 | タラヤカ | 卷十七 |
| 智旬 | カサナル | 〃 | 固護 | ヒタオモフキ | 卷十八 |
| 呀呷 | ノミハク | 〃 | 頡頏 | カシラサシト、ノフ | 〃 |
| 瞵眇 | ナカム | 〃 | 互折 | ツ、ヲヲリ | 卷十九 |
| 嗽獲 | ハオトシテ | 卷十三 | 蓬頭 | オホトレカシラ | 〃 |

これらは即ち、改編本において増補された文選訓(熟字訓)の特徴を示すものであり、やはり巻二以降の例が圧倒的に多い。これらの大多数、特に巻二以降の訓は、改編本において増補されたものと考えて良からう。

④ 観智院本は文選読形式、応永・永享点は非文選読形式(2例)

| | | | | | |
|----|-----------|----|----|-------|---|
| 層構 | トカサネカマヘタリ | 卷一 | 麗巧 | トウルハシ | 〃 |
| 櫻賜 | アヘタマフ | 卷一 | 和盤 | ノス、 | 〃 |

これらは、(18)猿投神社蔵弘安本によって文選訓であると判断されるものである。共に巻一の訓であり、二例目は観智院本が文選読形式を取っていることから、二例とも原撰本より受継がれたものである。以上のように、個々の訓について完全な弁別を行うことは困難で

①については、当時の我が国における文選訓の受容状況や使用状況と関わる問題であろう。但し、もし色葉字類抄のような辞書から増補されたのであるならば、それは文選訓に限らないわけであるから、問題はまた別となる。

以上の(i)と①の問題については、現段階では明確なことは言い難く、今後の検討課題としたい。また、今回の熟字訓についての検討結果を基に、今後単字訓についての検討も行ってゆきたい。

注

(1) 築島裕博士は、「訓読史上の図書寮本類聚名義抄」(国語学第三十七輯、昭34・4)、「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(所収)において、図書寮本を漢文訓読史上に位置付ける立場から、同本の和訓の漢籍との関係について説かれた。

(2) 中村宗彦氏は、「文選訓より見たる類聚名義抄」(大谷女子大国文第五号、昭50・5)において、文選と図書寮本・観智院本との和訓の比較を数量的に行っておられるが、個々の和訓に即した、改編本において増補された文選訓という視点による検討は行われていない。

(3) 図書寮本と観智院本との和訓の比較を、単字訓、熟字訓の別に「水部」について数量的に行うと、次のようである。

| | | |
|---------------|-------|-----|
| 両本に見られるもの | …………… | 271 |
| 図書寮本のみに見られるもの | …………… | 9 |
| 観智院本のみに見られるもの | …………… | 14 |
| 約 | 1035 | |

(4) 卷廿六に次のような奥書がある。

日本云／安元三年三月五日以文章博士敦周朝臣家本移点校合畢／正五位下行助教中原朝臣師直／應永廿九菊月十一日寫点畢 鼎子誌之

(5) 卷一に次のような奥書がある。

本云／弘安八年六月廿五日以菅江兩家證本校合書寫了／散位藤原相房／正應五年五月九日點了(中略)散位藤長英／正慶五年二月十四日書寫了 散位藤原師英／翌朝寫朱墨兩點對物了 師英

(6) 「鎌倉時代語研究」第七輯(昭59・5)に、影印と山崎誠氏の解説がある。

(7) 史記司馬相如伝における「沛文」は、書陵部蔵史記永正点では字音読である。

(8) 熟字訓のみで見えた場合、高山寺本、観智院本には新撰字鏡の訓が入っているのに対して、蓮成院本には、一部の例外を除きそれが見られない等の状況がある。

(9) 蓮成院本、高山寺本には見られず、観智院本のみに見られる熟字訓には、

(観) 取次 ミタリカハシ(借中・耳部)……………(連)(高)なし

(観) 取次 ミタリカハシ(借中・欠部)……………(連) 取次 ミタリカハシ

(観) 取次 ミタリカハシ(借中・又部)……………(連) 取次 ミタリカハシ

(観、連、高は夫々観智院本、蓮成院本、高山寺本)における耳部の「取次ミタリカハシ」のように、同本独自の重出例と考えられるものが屢々存する。

(10) 正確には「観智院本」法上」「法中」に見られる、改編

